

氏名	仁昌寺 貴子		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 8726 号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	全身性エリテマトーデス患者が出産に至る経験		
主査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	森 千鶴
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	涌水 理恵
副査	筑波大学助教	博士（看護学）	福澤 利江子
副査	筑波大学講師	博士（医学）	浅島 弘充

論文の内容の要旨

仁昌寺貴子氏の博士學位論文は、全身性エリテマトーデスの診断を受けた女性が出産に至る感情や思考の変化を経験として記述したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は全身性エリテマトーデス（Systemic Lupus Erythematosus 以下、SLE）の診断、治療を概観し、SLE の診断技術と治療法の発達により継続的な治療が必要になるものの予後が比較的良好の疾患となったことを述べている。そのため、現在では慢性疾患として位置づけられているが、妊娠・出産になると SLE が増悪する可能性もあるため、躊躇する女性が多いことを指摘している。

現在、少数ではあるが妊娠・出産をした事例を対象とした研究報告も認められることから、妊娠・出産を経験した女性がどのような感情や思考の変化を経たのかを明らかにすることを本研究の目的としている。

この研究によって、妊娠・出産を考える SLE 女性患者の看護への示唆が得られると考えられる。

（方法）

著者は妊娠・出産を経験した 20～40 歳の女性と妊娠・出産の経験のない 20～50 歳の女性で SLE の診断を受け、関東圏 5 施設に通院している患者を対象に、妊娠・出産に対してどのように思っているのか半構造化面接を実施している。半構造化面接に先立ち、対象者の背景として SLE 発症年齢、合併症・併存疾患の有無、職業、同居家族、治療内容や妊娠・出産歴（妊娠年齢、妊娠週数、新生児体重）を聴取している。分析はグラウンデット・セオリー法を用い、理論的飽和に至るまで継続的比較分析を行っている。またデータについて信憑性、独創性、共鳴性、有用性の視点からも検討がなされ、データの質が担保されていると考えられる。

（結果）

妊娠・出産経験のある SLE 患者 25 名（平均年齢 33.6 歳）と妊娠・出産経験のない 2 名（平均年齢 50.5 歳）の SLE 患者から 33～93 分間インタビュー調査を実施している。妊娠・出産経験のある SLE

患者の平均発症年齢は 21.6 歳、罹患期間は 9.6 年であったのに対し、妊娠・出産経験のない SLE 患者は罹患期間が 12.5 年であった。また妊娠・出産経験のない SLE 患者は発症前に流産を 3 回経験していたため、SLE 発症を契機に妊娠を諦めた対象者であった。また妊娠は正期産と早産が半々で平均妊娠期間は 36.5 週であり、新生児の生下時体重は平均 2400g 程度であるという特徴を述べている。

著者はインタビューデータから、対象者が妊娠・出産に伴う身体への影響に加え、SLE の影響も同時に考えており、未知の経験であることから「SLE は自分で病状をコントロールできない不確かな病気」というコンテクストを生成した。また妊娠に至るまで、妊娠から出産の時期、出産後の状況とそれぞれの局面で変化する対象者の思いを明らかにしている。

また、SLE の診断を受けた女性は自分の SLE という診断による身体状態の変化を受けとめつつ女性としてのアイデンティティが揺らぎ「女性としての価値を低く感じ」と著者は述べている。しかし夫の支えを得、自分として覚悟を決めると「普通に出産を望みたい」という気持ちから「出産意向を汲む医師を求め」て妊娠に至るプロセスを明らかにしている。さらに妊娠・出産の気持ちを理解してくれる医師の協力を得て恐怖や戸惑いを抱えながら「出産に臨み手を尽くし」、「動揺しつつも出産を目指し」、最後には不安はあるものの夫や母親に支えられ、見のために耐え「祈るしかない」という思いで出産に至っていた。出産後 SLE の診断を受けた女性は「普通の女性に近づいた」という実感を持つことを明らかにしている。

(考察)

著者は SLE の診断を受けているが故に妊娠前から不確かな状況であるが、妊娠によって不確かさが高まり不安と隣り合わせで過ごしていること、また安全に出産をするために妊娠中も SLE の病状のコントロールを医師に委ねて不安に折り合いをつけていることの 2 つが SLE の診断を受けている女性の妊娠・出産を経験している患者の特徴であることを明らかにしている。また、著者は SLE の診断を受けた女性が妊娠・出産に取り組む姿勢の違いには、医療職者とのコミュニケーションが影響していることを確認している。医療職者とのコミュニケーションがスムーズな場合には患者が欲しい情報の提供がなされており、妊娠・出産に積極的に取り組んでいる様子が認められたと述べている。

さらに SLE の診断を受けた女性は、自らを女性として価値が低い者とみなしていたが、妊娠・出産の経験をとおして「普通の女性」になった自己を確信し、自己価値が変容していることを明らかにしている。

これらのことから著者は SLE の診断を受けた女性に対する看護として、患者の不安軽減のために傾聴することや思いを十分聞き、医師との橋渡しや調整役として機能することが重要であると述べている。また、継続的に情報を提供することの必要性について言及している。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、これまで看護が十分に行われていなかった女性の SLE 患者の思いをくみとりながら、妊娠・出産に至る経験について詳細に述べた研究であり、大変意義深いと思われる。特に妊娠・出産の経験を通して、SLE の診断を受けた女性の自己価値が変化することを見いだした点や SLE 患者特有の思いを明らかにしたことにより、今後の看護援助の際の根拠となり得ると考える。さらに患者は、SLE について自分では病状のコントロールが難しいと感じており、医療職者と継続的な関係を維持したいと考えていることが明らかになり、今後の看護援助において有用だと考える。

平成 30 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。